

氏名	村田 尚子
学位の種類	博士（人間文化科学）
学位記番号	甲第人14号
学位授与年月日	2014（平成26）年3月14日
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第3条第3項第1号
学位論文題目	Diet, Dress and Disease : Images of Female Alienation in Charlotte Brontë's Works （食べ物、衣服、そして病：シャーロット・ブロンテの作品における女性疎外のイメージ）
論文審査委員	主査 教授 原 英一 副査 教授 原田 範行 副査 教授 Kleitz, Dorsey 副査 大阪市立大学大学院文学研究科教授 田中 孝信

内容の要旨および審査の結果の要旨

I. 論文内容の要旨

本論文は、Charlotte Brontë（1816-55、以下、Emily Brontë、Anne Brontë と区別してシャーロットと略記）の小説における女性の疎外状況とその克服の過程を論じて、シャーロット文学の文化的、歴史的意義を解明しようとするものである。シャーロットについてはすでに大量の先行研究がある。過去30年間ほどはフェミニズム・ジェンダー論やポストコロニアリズムが研究の中心になってきた。すでに論じ尽くされた感がある中で、本論文はシャーロットの小説における「異国性」foreignness の概念を基盤として、「食べ物」、「衣服」、「病」の表象に焦点を当てて、女性の疎外と主体確立の過程を論じるというきわめてユニークなアプローチを試みている。

シャーロットはイギリスの中流階級に属するが、その階級に一般的に見られた偏見、すなわちイギリスが外国に対して文化的・道徳的に優位にあるという偏見にとらわれて

いた。一方では、小説家としての彼女は、自分自身が当時のヴィクトリア朝イギリス社会の中の「他者」であること、「異国性」を持つことを強く意識していた。それは中流階級女性のジェンダーとしての異質性であり、そこから生じる疎外感につながっている。シャーロットは個人と社会との矛盾葛藤と主体性確立の苦悩を自身の作品中でさまざまな形で表現している。この時代において「外国」とは、イギリスから見てヨーロッパ大陸諸国を指すのみならず、海外植民地をも含んでいる。「食べ物」、「衣服」、「病」は、いずれも植民地と深く関わる。本論文は「女性」という主体が抱える疎外の問題を「異国性」という文脈で捉え、テキストの微視的なレベルでの分析と巨視的な歴史的展望との連関によって考察することにより、シャーロット研究に新たな局面を切り開こうとしたものである。

II. 審査の結果の要旨

1. 論文の構成

本論文は5章構成である。各章の内容は以下の通りである。

第1章では「女性のバイロニズム」が論じられる。バイロン卿 George Gordon, Lord Byron (1788 - 1824) は既成の秩序への反逆を描いた作品で知られる詩人である。体制への反逆と個人の独自性の主張はバイロニズムと呼ばれるが、一般的には男性に用いられるものであり、英文学史においては「バイロンのヒーロー」は一つのステレオタイプとして認知されている。本論文では、シャーロットの小説における「バイロンのヒロイン」を指し、その特性を議論する。シャーロットの女性キャラクターたちの葛藤は、バイロニズムへの傾斜とヴィクトリア朝的価値観との矛盾相克から生じている。ヴィクトリア朝のイギリス人は、イギリス女性は南欧やオリエントの女性に対して道徳的にも知的にも優れていると信じていた。しかし、バイロンが描くギリシャ、トルコ、スペインの女性たちはきわめて自律的であり、シャーロットがそれに共感を抱いていたことは明らかである。本章では「女性のバイロニズム」を「情熱」、「現実の女性性」、および「性役割の逆転」という三つの視点から考察している。シャーロットの初期習作では、バイロンの明らかな影響下で、女性の性的情熱が称揚されており、それを備えた女性キャラクターは後の主要作品に継承されている。ヴィクトリア朝の女性イメージは「天使」か「魔女」かの両極であったが、シャーロットはバイロンの *Don Juan* のキャラクター、ハイディー Haideé をモデルにして、両極化されない「現実の女性性」を提示した。「性

役割の逆転」は初期習作に見られる異性装に表現されている。

本章は、「女性のバイロニズム」という、先行研究にはない新概念を措定し、初期習作までも包括的に分析することによって、シャーロットによる女性の主体性探求の過程を十分に明らかにしている。

第2章では、シャーロットの主要作品、*Jane Eyre* (1847)、*Shirley* (1849)、*Villette* (1853)において、女性キャラクターの内的葛藤が、「異国性」の表象を通して、いかに表現されているかを探求している。これらの作品には外国人が登場し、その「異国性、異質性」が、女性主人公が備える「中流イギリス人女性」という属性に揺らぎを生じさせる。*Jane Eyre* に登場するクレオールの狂女 Bertha は、従来の批評においては、男性支配の犠牲者とみなされてきた。しかし、ここではバーサの死の有様に焦点を当て、そこではサティ (suttee、妻の殉死) の概念が転覆され、積極的、自律的な反逆の行為となっていることを示す。『シャーリー』に登場する外国人女性 Hortense は、主要人物の一人 Caroline に「天使的」イメージとは異なる「異質性」、換言すれば「本来の女性性」を覚醒させる機能を持っている。この小説での「女性による男性の看護」は、男性による支配を転覆する場となっている。男性支配への反逆と体制の転覆は『ヴィレット』での「魔女」のイメージによってさらにラディカルに表現される。

本章は、「異国性」の表象によって「中流イギリス人女性」ヒロインの内的葛藤を分析し、そこに植民地主義とジェンダーの問題が複雑に絡み合っていることを克明に明らかにしたものである。とくにバーサの死をサティとして捉えたことは重要な新解釈である。

第3章は「食べ物」とアイデンティティの問題を論じる。「食べ物」は他者との関係における自己定義と深く関わる。ポストコロニアリズム批評においては、植民地で生産される「食べ物」と本国での消費との関係が深く追求されつつある。シャーロットの小説においては「食べ物」を通じて、女性と男性支配体制との関係がコロニアリズムと密接に結びついて表現される場合が非常に多い。「食べ物」を男性に「給仕する」serveする女性の背景には、植民地の支配者と被支配者の関係が透けて見えるのである。シャーロットのヒロインたちが「給仕」を拒否することは、男性支配・植民地支配の権力構造への従属の否定を意味する。一方で、男性と女性が「食べ物」を「分かち合う」shareことは、『ヴィレット』の主人公 Lucy の場合のように、自身のセクシュアリティの認知であり、男性との対等な関係の主張となる。

本章は、ポストコロニアリズム批評を援用して、シャーロット文学の特性を「食べ物」から考察したものであり、その斬新な視点による解釈は新たな知見を提供したものと評価できる。

第四章は「衣服」とアイデンティティの問題を論じる。どのような衣服を身につけるかは、自己表現であると同時に、そこに作用しているさまざまな権力構造への服従をも意味している。『ヴィレット』の主人公が身につける質素な衣服は家庭教師という身分の表現であると同時に、自己のセクシュアリティの抑圧を象徴するものでもある。一方、『ジェイン・エア』でジェインが Rochester から与えられる豪華な衣装は彼女が男性権力による性的搾取の対象となることを示して、強い違和感を生じさせる。『ヴィレット』においてはくすんだ色の衣服を身につけていた主人公が、自らの意思によって鮮やかなドレスを選択することに、彼女が女性のバイロニズムを認識し、自己主張に踏み切ったことが示される。一方、衣服の素材となる布地は植民地と密接に関係する。

本章では、18世紀以来の木綿あるいはモスリンの植民地からの輸入、服飾産業における女性労働者搾取という幅広い文脈の中で、小説の女性主人公たちの衣服のイメージを追求し、説得力ある議論が行われていると評価できる。

第5章では「病」の表象が議論される。フェミニズム文学批評においては、シャーロットの作品等、ヴィクトリア朝小説での女性の「病」は、男性による支配体制が規定する「女性性」からの逸脱を表すものであるとされている。それは男性支配下における女性の自己確立の苦悩の表れであり、Elaine Showalter の言葉を借りるならば「女性独特の病」female malady である。本章では、基本的にはこうしたフェミニズム批評の枠組みに沿ってシャーロット作品における「病」の表象が論じられるのであるが、ここまでの議論と同様に、植民地主義の観点を導入しているところが斬新な点である。ヴィクトリア朝ではコレラなどの伝染病は植民地に起源を持つものと考えられ、その伝染拡大は「植民地からの報復」とも解釈されていた。

本章は、神経症と伝染病が女性の「異国的」欲望と「ヴィクトリア朝的」慣習・支配体制との葛藤として捉え直されることを論証し、コロニアリズムとフェミニズムの解釈を融合するという成果を示したものである。

2. 論文の特徴

本論文は、シャーロット・ブロンテの文学について、「異国性」をキー概念として、

ヴィクトリア朝女性の疎外の問題を追求したものである。「食べ物」、「衣服」、「病」の表象に焦点を当てて、それらが「異国性」、「疎外」の表現として、さまざまな意味を重層的に内包する様を詳細に分析したところが大きな特徴である。過去三十年にわたって発展してきた、現代文学理論の主流を形成しているフェミニズム、ポストコロニアリズムの探求方法を卓越した洞察力によって統合したこと、少女時代の習作を含めて、シャーロット文学の全体を研究対象としたことも特筆すべきである。ともすれば一つの理論に偏する場合が多い現代のイギリス文学研究状況にあつて、このような複眼的視点はユニークなものである。しかも、理論に引きずられることなく、テキストの堅実な読みを論述の根拠としているがゆえに、強い説得力を持つに至っている

3. 論文の評価

シャーロット文学については膨大な先行研究が存在し、新たな知見を提示することは至難となっている。しかし、本論文においては、卓越した洞察力による、これまでになかった多くの斬新な解釈が随所に見られる。バイロンの影響を「女性のバイロニズム」として追跡したこと、『ジェイン・エア』でのバーサの死をサティと捉え、さらにその家父長制的イメージが逆転されていることを論証したこと、バーサにコレラのイメージが投影されていることを明らかにしたこと、その他、「食べ物」、「衣服」、「病」という表象の分析によって、女性の疎外状況と自己確立の過程を検証したことは、先例のない独創的な研究成果である。さらに、フェミニズムとポストコロニアリズムを統合した論述によって、シャーロット文学の全体像とそこに一貫するテーマの解明に至ったことは、単にシャーロット研究にとどまらない重要な学術的意義を持つ。

以上により、本論文は課程博士の学位認定の水準に充分に達しているとみなされる。

4. 最終試験の概要

2014年1月15日(土)午後2時から3時まで、公開形式で申請者による論文の概要・意義についての発表が行なわれ、審査委員および他の出席者からの質疑、応答がなされた。その後別室に移動し、午後3時30分より、審査委員(学外審査委員1名を含めて4名)により、論文の全体および細部について、詳細な質疑応答が行なわれた。その結果、審査委員全員の一致により、論文内容について合格と認定された。

外国語(フランス語)については2014年2月9日(日)午前11時から正午に筆答試

験が行なわれた。その結果、外国語についても十分な学力があると判断された。

以上を総合して、最終試験の判定を合格とした。